

## 〔特別講演〕

## 田邊一雄と複十字会活動

田邊 正忠

(I) 患者は正しい知識を持たなければ結核と立ち向かうことは出来ない

田邊一雄は明治24年(1891年)12月28日、横浜市中区花咲町に生まれた。父富次郎は岡山県浅口郡里庄町の出身である。自力で私立の自牧学校を創り、自ら校長として教鞭をとっていた。田邊一雄は7人兄弟の2番目に生まれた長男である。明治38年4月、一雄は神奈川県立第一中学校に入学する。中学3年の時に左胸が強く痛み肋膜炎と言われた。官庁の仕事を夜間に手伝い早稲田大学理工学科に進学した。小田原電気鉄道株式会社に入社する。早速箱根三枚橋発電所の建設を命ぜられた。箱根須雲川から水をひき、日本では珍しい水塔をつくるため苦勞した。やがて発電所が建設されると間もなく、箱根登山鉄道の工事が開始された。鉄道の複雑な設計と計算に引き続き従事することになる。大正8年正月インフルエンザにかかり、欠勤し自宅で休んでいる時だった。「コンクリートの一部が大雪のため決壊したから、直ぐに現場を見に来てくれ」と工夫が迎えに来た。雪まじりの横殴りの雨で、漸く目的地に辿り着く。破損は大きく、冷えきってしまった体は身動き出来ないほどに疲れていた。それからは高熱が続き咳、痰、盗汗が始まる。近所の医師は往診してくれたが、肺結核とは言わずに、一カ月も薬を飲んだが熱は下がらなかった。小田原で信望が高い医師がいるというので、診てもらうことにした。江良元三郎医師は診察した後で「肺結核と肋膜炎で、長期の安静が必要である」と説明したが、正しい療養が出来たかという、そうではなかった。色々な雑誌、薬の宣伝で誤りを繰り返した。7月19日には大咯血をして瀕死の状態に追い込まれた。朝から出始めた血液は止まらず、医師も家族も諦めているのが分かった。友人に教えられて、医学博士原栄の〔肺結核予防療養教則〕を手に入れ、読み始めた。原医師は、初めて系統的に〔大気安静療法〕を日本に紹介した人である。この書物を読んで早速藤椅子を買い、静臥を進め快適な毎日を送れるようになった。大正11年4月、宮沢九万象司祭により洗礼を受け、精神的にも安定し次第に、結核療養者のための人生を歩みたいと思うようになる。大正11年11月新潮社から茂野吉之介著の〔肺病に直面して〕が発行された。これにはサナトリウム療法についての明快な紹介と確固とした洞察が述べられていた。茂野は石炭統制会の理事となり、ロンドンに渡り結核に罹患し、帰国した人である。田邊はますます結核を治す啓蒙の仕事を発足させたいと思うようになる。またその頃吉木三郎を知るようになる。大正13年1月3日、吉木は小田原の田邊を訪ね出版について語り合った。同年3月1日に〔療養生活〕第1号500部が発行された。田邊は「結核を理解させる方針と同病相憐れむの気持ちを持って進もう」と

いう創刊の言葉を記している。当初は療養生活社の社名であったが、8月に自然療養社と改め茂野の〔安静と運動について〕の原稿も誌上に発表している。田邊は〔最新自然療法指導書〕を書き上げ、肺病黎明運動の第一歩を踏み出した。

## （Ⅱ）結核患者自身が自覚して創った自然療養社の活動

大正12年 9月 1日午前11時58分、関東大震災が起こり自然療養社も大きな被害を受ける。輸送途中で出版物やパンフが焼かれ、療養生活の出版業務は大きな打撃を受けたが、2カ月後には仕事を再開することができた。自然療養社は通信指導に力を入れ、会員になった者には指導書 6巻と療養生活誌を送り、結核に対する啓蒙運動を発展させた。熱心な同志が集まり事業に参加した。大正13年 2月には代理部が大阪市難波に誕生した。療養に必要な品々を多数購入して会員に販売した。乳酸菌飲料水、療養日記帳、静臥椅子などは、大変に喜ばれた。代理部は順調に売り上げを伸ばした。〔われわれ療養者は医者まかせの他力本願では決して治らない。患者自身が肺病を理解して、自ら治す気持ちにならなくてはいけない…〕と田邊は書いている。けれど社会の肺病に対する偏見は強かった。当時の多くの苦勞話の中から、小西長英の事例を紹介する。小西は宮大工をしておったが、日赤病院で肺結核と診断され、山田の親元へ帰る。高熱が続くようになる。お金も使い果たしたので、家族の世話にならない自然療法で病気を治す決心をする。無言で安静療法を開始した。食物は握り飯に薬缶いっぱいの水と新聞紙でくるんでもらうおかずである。痰は痰壺に取り煮沸して便所に捨てた。血痰と高熱は何カ月も下がらなかったが半年を過ぎ下火になる。家族の迷惑にならぬように箱車を作り、川の土手に行かせてもらう。箱の中に人が捨ててであると騒ぎになり、別居中の妻は恥さらしだと去ってしまった。四年目から熱や血痰も取れ体調が回復してきたので、そろそろ歩行練習を始める。暑くなると場所を松林の中に移してみた。次に考えたことは自分で食べていくことだ。自活ということである。下駄の歯入れを 2~3 時間やって食べていけるようになる。富田浜の知人を頼って仕事しながら、無銭で転地をすることを思い立った。箱車を手押し車にし、歯入れの注文をもらっては、先へ進んだ。川の堤や墓地は寝心地が良かった。お客があれば何日でも泊まり津の町へ出た。途中巡査にとがめられ事情を話すと、「なにっ肺が悪い、死なんようにせい」と励まされた。食事がすめば痰壺を煮沸し肥溜めに空ける。作業が終われば安静をし疲れを取った。彼は体力ができるに従い、肺病患者に奉仕する人生を送った。

## （Ⅲ）療養ホームの使命と、社会の誤りを批判した回復者たち

その頃僚友が集まって自然療養ができたらという、希望が実って実現したのが療養ホームであった。本社近くの家を借り、近くの主婦が賄いをしてくれた。療養下宿の草分けと言って良からう。入所者は両方で15名になった。一カ月55円の安さの上に、毎週一回江

良元三郎医師が来診し、僚友たちは愉快に規律的な生活を送った。そうした時に結核患者が小田原に来ると、避暑客が嫌がるので止めさせて欲しいと、近所の人が苦情を言い新聞も嫌がらせを書き立てたので、ついに大正14年 7月で二つのホームを閉鎖することになった。自然医療者のやったことは医師たちからはインチキ扱を受けたこともある。昭和 2年 4月から 5月にかけて、民間療法の情報を読者から募集したところ 214件が集まり立派な研究となった。戦後丸山博教授により高く評価されて、[日本科学技術史大系、医学 2の 145ページ]に収められている。また昭和 2年 8月15日から20日までに、田邊は自然医療の講習会を開いた。講師として額田豊医師と茂野吉之助をお願いし、会員は静臥椅子で演壇に足を向けて集まった。昭和 2年10月には結核に関する新聞広告を衣笠樵夫がまとめて[療養生活]に発表した。誇大に広告掲載することは新聞の道義に反すると、申し入れたが、経営に目のくれる新聞社には通じなかった。東京朝日、東京日々、大阪朝日、大阪毎日などの大新聞社の名前が上げられている。紹介された民間療法としては人骨、かわうその肝、石油、硫酸、蚤取り粉、犬の糞、いぼたむし、蛆虫、金魚の目玉、なめくじ等多数のいかがわしい品名と売薬百余種、不当な信仰などさまざまである。溺れる者は藁をも掴む病人の心理は何処の国にもある。けれどこれに付け入る悪徳商人やえせ宗教家の行為は、決して許せるものではない。やがて結核予防デーが毎年 4月27日に行われるようになる。その時のスローガンを見れば、当時の結核予防協会ですえ結核に対する理解の浅さが良く分かる。[結核患者は間接的殺人者][肺病の痰は火のなき爆裂弾]などで、世間に恐怖心を与えるだけの内容であった。これと比べ自然療養社はクリスマスシールを発売し、療養歌留多を会員からの応募で作って結核の正しい啓蒙運動を続けていった。その幾つかを紹介する。[急がば回れ日々の安静][よく働く者はよく休め][鯛より鰯、安価な栄養]など充実した内容で、味のあるものばかりであった。また自然療養社の十周年を記念して大正十三年から、遠藤柳太郎が僚友訪問を行い非常に歓迎された。田邊一雄より 5歳年上であった茂野吉之助は、ロンドンに出張中、咯血をし帰国し小田原で療養していた。[たった一人の黎明運動]を思い立ち、著書に[肺病に直面して]などがある。多士済々の自然療養社にさらに西須諸次の味方がおったことは、大きな喜びであった。本名は和達清夫で地震学専門の理学博士で、多忙な研究生生活を続けていた。そのかたわら同病愛の気持ちからサイスマロジ[地震学]のペンネームで主婦の友や療養生活誌に執筆を重ねている。次に[あく迄希望あれ]の一部を記してみる。「或る者はにんにくを食べて全快し、或る者は何も療養しないで全快し、みんな事実(ファクト)だ。吾々は事実(ファクト)に幻惑されるのはやめよう。自分たちで科学的に判断して、療養方針を樹立しようではないか。事実は我々に貴い教訓を教える。…」複十字のマークは結核撲滅運動を意味する万国共通の旗印であって、自然療養社が結核回復者の団体を[複十字会]と命名したのは創立当初であったが、正式の総会は昭和 7年 9月25日、東洋軒で開催されている。参加者は 2府 5県

にわたり28名であった。〔結核回復者は結核体験者として、自分の健康保持に努めるとともに、僚友を慰め援けること、自己の経験にもとづいて社会に貢献すること〕を目的とした。その後複十字会総会は毎年十月東京で開催された。

#### (IV) 療養者の生きる姿勢から、患者学を考える

結核療養者には医療関係者や衛生行政者が考える医療や患者の概念とは、可なりかけ離れた立派な問題意識があるように思えてならない。しかし両者に介在する生きる姿勢と使命感の大きな違いは、これからの高齢化社会を考えるうえで、無視してはいけない大切な鍵が潜んでいるように思われる。言ってみれば社会に対する強い責任感が感じられることである。私は幸いに軽症であったが、重症の結核で瀕死の状態に追い込まれた体験を持つ。先輩たちの優しいしかも辛抱強い生き方に学ぶことが多い。今日では老後の生き方についての大切な教訓を学び取りたい気持ちに駆られている。最後に患者学と呼ぶにふさわしい視点に触れて終わりにしたい。私が高齢者の人間学的な別の面に目が開けた動機には次の三つがある。一つは父田邊一雄が肺病を患い、新しく結核を撲滅する社会活動を回復者同士でやりとうしたことである。二つには高齢化社会のなかで、老人自身の持つ能力と生きる姿勢が忘れられている対応の誤りである。第三はアユルヴェーダ医学で語られる、人生とは何かという疑問と、体質、気候、年齢により微妙に加減する養生法と、患者自身が医療や健康の主体者であるとする捕らえ方の知恵を学んだことであった。

#### 参考文献

- 療養生活（1号～495号）自然療養社
- 田邊一雄著「最新自然療法指導書」自然療養社
- 原英著「肺病患者は如何に養生すべきか」主婦の友社
- 茂野吉之助著「結核征服」新潮出版
- 茂野吉之助著「肺病に直面して」新潮出版
- 西須諸次著「あくまで希望あれ」自然療養社
- 和達清夫編著「療養者のつづる日本の肺病」結核予防会 複十字会